

## サーチライト With Pastor Jon 黙示録 第4章 パート1

.....

このメッセージはアップルゲート クリスチャン フェローシップの、ジョン・コーソン牧師が公開したメッセージを、アメリカ在住の日本人クリスチャン木下言波が翻訳して YOUTUBE やブログに上げたものを文字化したものです。世界的なインターネット規制が始まろうとしています。私達はその日のために、文字にして紙に記録する必要を感じました。また、インターネットに不慣れな方や字幕を追って読むのが困難な方のためにも必要があると主に迫られたと感じます。

※インターネットのメッセージを、文章化するこの働きを始めた姉妹が、現在目を患って治療中です。どうか、りょくさんの為にも、お祈りください。

---

*「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにはならない。」*

ヘブル4:7

メッセージ by ジョン・コーソン牧師 アップルゲート クリスチャン フェローシップ

<http://joncourson.com/>

7590 Highway 238 Jacksonville, OR 97530

訳 by 木下言波 DivineUS : <https://www.youtube.com/user/TheDivineUs>

筆記 by Rin

教会時代が終わり、次は教会が天国に挙げられる「携挙」です。

その後、(黙示録 4:1)

“その後”とは「教会史の後」。

ギリシャ語では「メタ タルタ」

興味深い事に、黙示録の1章から3章の中で、「教会」という言葉は19回も出てきます。

19回！

だけど、4章からは1回も出てきません。

なぜなら教会は天国にいるからです。

教会も患難を経験すると言っている人たちは、この書の流れ、神が定めたあらすじを知らないのです。

教会はこの書の中に度々登場しますが、突如天国に行きます。

それから6章から19章は、地上での患難について書かれていますが、天国にいる教会は一切関わりません。

その後（教会史の後）、私は見た。見よ。天に一つの開いた門があった。（黙示録 4:1）  
いいですねえ。

3章 20節では、イエスが教会の扉の外に立って言いました。

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいつて、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。（黙示録 3:20）

誰でも主に心の扉を開く者に、主は天国の扉を開いて下さるのです。

まだ、そうしていないなら、どうか開いて下さい。

そうすれば、主は喜んで、あなたに天国の扉を開けて下さるから。

正にここでは、ヨハネが、天を見上げると扉が開かれていたと言っています。

主が、あなたと私に天の扉を開かれるのです。

また、先にラッパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声があった。  
（黙示録 4:1）

ここで何か気付きましたか。

第1テサロニケ 4章。

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。

それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。

このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。

（第1テサロニケ 4:16 - 18）

これは「携挙」。

ここは、明らかに携挙のこと、主が私たちと会うために、突然雲の中に現れることを言っています。

「再臨」は主が地上に戻って来られることですから、携挙と再臨は違います。

携挙は、主が私たちと雲の中で会い、世界が患難の中にある7年の間、私たちを天に上げているのです。

私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声があった。「ここに上れ。」（黙示録 4:1）

主がラッパのような声で私に「ジョニー、ここに上れ！」と言った時、その途端、私はもういません。私は行きますよ。あなたも同じです。

「ここに上れ！」この声を聞くのが待ち遠しい。

ヨハネはそれを聞きました。

「ここに上れ。この後（メタ タルタ）、必ず起こる事をあなたに示そう。」（黙示録 4:1）

なぜ、この1節の中だけで「メタ タルタ」が2回も使われているのでしょうか。

主がこれを強調されていると思いませんか。

「この後」「この後」。何の後？「教会史の後」。

最後の一人が救われて、キリストの花嫁である私たち、すなわち教会が完成した時、携挙が起こって私たちは天に上るのです。

次2節。

たちまち私は御霊に感じた。（黙示録 4:2）

携挙について、第1コリント 15章にこう書かれています。

終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。（第1コリント 15:52）

たちまち、御霊の中で変えられる。

二度と肉と格闘する必要はないのです。

キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。

（第1ヨハネ 3:2）

ということで、ヨハネは携挙されました。

すると見よ。（黙示録 4:2）

一番初めに彼の目に入ったもの、最初に目を奪われたものは、「天に設けられた御座」。

別の言い方をすれば、「天には本当に御座がある。」

ヨハネがこれだけは伝えたいと言っている事、それは、地上では困難、葛藤、迫害、問題など、胸が痛み、つまづくような色んなことを経験しているけど、「天には本当に御座がある！」

ここで、ヨハネの目に留まった御座の特徴について書き留めて下さい。

一つ目。

旧約聖書時代、イスラエルの人々は、ひっきりなしに偶像礼拝に陥りました。

例えばバアル礼拝。

彼らは、このバアルやアシュタロテの祭壇をあちこちに移動させ、一つ所に据えていませんでした。それは永遠ではなく、常に動いていたのです。

その“可動式礼拝所”への答えが、

私たちの聖所のある所は、初めから高くあげられた栄光の王座である。

（エレミヤ書 17:12）

世の神々の礼拝所は常に動いています。

あちこちフラフラしていて固定されていません。

あなたが“物質主義”を礼拝するなら、あの家、この車を買って、それらを礼拝します。

1週間、1ヶ月、1年、或いは10年。そのうちそれらは効力を失い、新しい家、更にいい車が必要になって、また得ようとするでしょう。

“快樂主義”を礼拝するなら、1週間、1ヶ月、3ヶ月、1年、または10年間はそれらを拝みます。そのうちそれらは効力を失って、他の何かや新しい相手を探しますが、それらには魅力がなく、一定に留まらずに、あっちにこっちにと動き回ることになります。

“知識・教養主義”を礼拝するなら、物事を追求し、理論に感動し、その能力に感嘆します。しかし、1週間、1ヶ月、4ヶ月、1年、そして10年も経てば興味を失うでしょう。ポイントは、偶像の神々、物質主義、快樂主義、理論、何であれ、これら全てはどれも移り変わるといふこと。

この世はあれこれ気持ちを向けますが、結局はそれに飽き、行って、やって、次はナニ？

真実は、私たちの聖所のある所は、“初めから”高くあげられた栄光の王座である。

(エレミヤ書 17:12)

つまり私たちの御座、私たちが礼拝する場所は、永遠に固定されているということ。

私は40年間、主と共に歩んでいますが、全く退屈しません。

全然古臭くない。

あっち行って、これをやって、次はナニ？とはなりません。

どんどん良くなり、面白くなり、レベルが高くなって、驚きの連続です。

永遠に飽きることがなく、絶対に疲れ果てることはない。

動くことのない栄光に満ちた高さところ。

そこで、私たちは礼拝するのです。

二つ目。御座に座っておられる方。

天に一つの御座があり、その御座に着いている方があり、その方は、碧玉や赤めのうのように見え (黙示録 4:2 - 3)

ヨハネは御座に座っておられる方について、とても面白い形容をしました。

碧玉と赤めのう。

何故、この二つの石がここで用いられたのでしょうか。

この碧玉は、現代の碧玉とは違い、黙示録に書かれている新しいエルサレムにある透き通った石で、ダイヤモンドとも言えるでしょう。

これは光のことで、御座に着いている方は光。

神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。(第1ヨハネ 1:5)

『神は光』。

碧玉（ダイヤモンド）のように透き通った石。

「天に御座が設けられていて神が光なら、何故、私は暗闇の中で苦しんでいるのか。この試練、この苦勞、この…。」「神はどこにいる？ どうしてなの？ 何故助けてくれないの？ 私の人生、どうなっているのか教えて！」

よく見て下さい。

神は光だけではないとヨハネは言います。「神は愛。」

なぜなら神は愛だからです。（第1ヨハネ 4:8）

『神は愛』。

これは、赤めのうを指しています。赤めのうはルビー。赤い石です。

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。（ローマ 5:8）

十字架に釘で両手を打ちつけられ、いばらの王冠を頭にはめ込まれ、わき腹を槍で突かれて、流れ溢れ出たキリストの赤い血。

主は私のために血を流されたのです。

神は私への愛を証明されました。

過去形です。

私が無知で、反抗的で、罪深い時も、キリストは木に打ちつけられながら、私のことを考え、思っていて下さった。

人類全体ではなく、“ジョン・コーソン” 一個人を、個人的に。

主はあなたのことを考え、思いながら、あなたの代わりに死んでいかれました。

その時、ルビーのような赤い血が流れ落ち続けた。

そのことによって、主は、「これ以上に、あなたへのわたしの愛を証明するものはない。」と示されたのです。

「他に何ができようか。」と主は言われます。

「わたしは人の姿をとり、そしてほふられた。肉体的にほふられ、精神的に打ち叩かれ、靈的に孤立させられた。」

あなたはこう言うかもしれません。

「御座におられるのがイエスだとどうして分かる？ 本当にそうなのか？」

出エジプト記 28 章に出てくる碧玉と赤めのう。

二つとも大変興味深いです。

この章に記載されている祭司の胸当てに付けられた 12 個の宝石は、それぞれイスラエル

の 12 部族、ヤコブの 12 人の息子たちを表しています。

3 列 4 段で 12 個。

一番初めの石は赤めのう（ルビー）。この章によると、これは長男ルベン。

“ルベン” の意味は “見よ” “息子を見よ”

最後の石は碧玉（ダイヤモンド）。これは末の息子ベニヤミン。

“ベニヤミン” の意味は “わたしの右手の子”

つまり、“わたしの息子を見よ” と “わたしの右手の子”

これは誰のことでしょう。

御座におられるのは、主イエスです。

御座に座っておられる方。ここ、注目して下さい。

3 節に “座った” と書いてあります。（英語版）

皆さん、よく聞いて下さい。

イエスは御座に座っておられるのです。主は座っておられる。

主は御座の前を行ったり来たりしていません。

主は天国の縁から、地上のあなたや私を不安気に見下ろしているのではなく、座っておられるのです。

旧約聖書の幕屋の中には、祭司が座る場所はありませんでした。

祭司の働きは、決して終わることがなかったからです。

けれどもここ天国では、イエスは座っています。

全ての業を完了したから。

「オーノー！ どうしよう!!」 「ああ、ジョンが…。乗り越えられるといいんだけど…。わからないなあ。」なんてことをイエスは言っていない。

主はすっかりリラックスして、御座でくつろいでいます。

光と愛、そしてダイヤモンドとルビー。

主は、全てをコントロールし、安心して御座に座り、くつろいでおられるのです。

**その御座の回りには、緑玉のように見える虹があった。（黙示録 4:3）**

そして、御座の回りには虹。

“虹” が表しているものは当然、『恵み』

神がノアを特別に恵まれたのを覚えていますか。

全世界が大洪水で滅ぼされた後、空に虹がかかり、神が契約を示されました。

「二度と同じことをしない。」（創世記 9:16）

虹は、恵み、平和、約束のしるしで、天国に行くところの御座を見ることができます。

そこで主に会い、御座の回りには大きな恵みの象徴がある。

これは驚くことではありません。

ヘブル人への手紙にこう書いてあります。

ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。(ヘブル 4:16)

イエスは地上にいる時、「わたしの元に来なさい。」と言われました。

これは恵みの御座のことです。

あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。(ヤコブ 4:2)

大胆に御座に近づこう (ヘブル 4:16) と、聖書は私たちに熱心に勧めています。

恵みとは、受ける資格のない私たちに、無条件に与えられる好意のこと。

お金を出しても買うことができないもの。

私は恵みが始まりではなく、恵みが全てだと確信しています。

神は、直接的にも間接的にも栄光を自分のものにしない人々を探しています。

その人たちを大いに祝福するために。

「私が祈ったからさ。」「私の預言的な洞察力のおかげだ。」「私の訓練された霊的賜物の結果だ。」などなど言わず、「これは他でもなく、ただ神の恵みによるものです！」と言う人々を、神は探しておられます。

「これは恵みです。」と心から知り、口でそう言うなら、その時、神は全ての栄光を受け取られるのです。

ますます大胆に恵みの御座に近づきましょう。

「主よ。私にはそんな価値はありません。」「最近、祈っていません。」「喜んで学んでいません。」「最近、奉仕もしていません。」

これは、祈りの御座でも、学びの御座でも、奉仕の御座でもなく“恵みの御座”。

受ける資格のない者に、無条件に与えられる誉れと好意。

だから祝福を受けた時、「驚くばかりの恵みだ！」(Amazing Grace!)

そして、自分自身でも他の人でもなく、主をたたえ、神を礼拝する者となるのです。

「主は素晴らしい!」「主は素晴らしい!!」

ハレルヤ!

主をほめたたえます。

つづく

人とは何者なのでしょう。

あなたがこれを尊び、これに御心を留められるとは。(ヨブ記 7:17)